
論説

大地あるいはパチャママ信仰の複層性—— ペルー、クスコにおけるアンデス世界の広がり

岡 本 年 正

1. はじめに

近年、環境保護の観点、そして先住民文化の尊重や先住民文化からの学びを得ることにより、これまで対象でしかなかった自然に対し、国家が法的に主体を認める、つまり自然に対して法的人格を認めるということが起きている。例えば2017年に、ニュージーランドのワンガヌイ川や、インドのガンジス川やヤムナー川に¹⁾(Cf. 奥野2024: 184-185)、直近では2024年、ペルーのマラニョン川に国家が法的人格を認めてきた²⁾。

- 1) ニュージーランドのワンガヌイ川については、ニュージーランド・ジオグラフィック誌の創刊者であり編集者であるケネディ・ウォーン氏の記事が、ナショナルジオグラフィック誌(日本語版)のウェブサイト上に要約として掲載されている(「ニュージーランドが川に『法的な人格』を認めた理由」<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/20/022700131/>)(2025年8月31日最終閲覧)。またインドのガンジス川については、法人類学者の中空萌が積極的に論じており、こちらもインターネット上で簡単に読むことができる(「ガンジス川が法人になるとき——『自然の権利』と諸世界の翻訳としての法 ひろがりアジア(12)」https://webgenron.com/articles/article20240624_01)(2025年8月31日最終閲覧)。
- 2) ペルー北部、ロレト県のアマゾン地帯を流れるマラニョン川では、1997年から2024年に至るまで、石油の流出事故が60回以上も起きてきた。そのような状況の中、その周辺に住む先住民民族のクカマ・クカミリア出身のマリ・ルス・カナキリは、子供のころから30年以上にわたって、マラニョン川を守る活動をしてきた。その結実として、2024年3月、ペルーの裁判所は、マラニョン川に法的な人格(personalidad jurídica)を認め、存在し、自由に流れ、汚染から自由である権利を有する存在(un ser con derecho a existir, a fluir libremente y a estar libre de contaminación)とした。これによりマラニョン川は、ペルーにおいて法的人格が付与された最初の川となった。この情報は、ペルーでニュースを扱うラジオ局RPP(Radio Programas del Perú)のウェブサイトから一部を要約したものである。記事自体は2025年5月16日のものであり、マリ・ルス・カナキリが、2025年のゴールドマン賞(The Goldman Environmental Prize 2025. 環境分野のノーベル賞とも呼ばれる)の受賞者となったというニュースである。(La

またペルーのマラニョン川より以前、南米においては自然あるいは大地の権利が、2008年にエクアドル憲法において、2010年にボリビアの「母なる大地の権利法」(Ley de derechos de la Madre Tierra)によって認められている(Estado Plurinacional de Bolivia. Asamblea Legislativa 2010: 3)。特にエクアドル憲法においては、「自然あるいはパチャママにおいて、命は生み出され自ら再生産する。パチャママの存在は、統合体として尊重される権利を有し、そのライフサイクル、構造、機能、そして進化プロセスの維持と再生産への権利を有する」(República del Ecuador. Asamblea Constituyente 2008: 52; Cf. デ・ラ・カデナ2017: 47)と記され、自然そのものとしてのパチャママ(大地母神)の権利を国家が認めている。

エクアドルやボリビアの法律における自然に対する法的人格は、近年の川に対して人格を認めたことと比べると、理念的であると言える。なぜなら、具体的な川、つまり名前のある川(これにより領域が決まり個別的な川を指すことになり、川一般ではない)に人格を認めるのに対し、大地や自然そのものとしてのパチャママは、より普遍的な意味での大地全体や自然全体となり、具体性を欠いているためである。確かに、パチャママは具体的な名前であるが、エクアドル憲法内におけるパチャママは上述のように「自然もしくはパチャママ」(La naturaleza o Pacha Mama)と第71条(Art. 71)に記されている。つまりここでのパチャママは、自然全体と同義として用いられている。またパチャママは「母なる大地」と考えられている。とはいえ、その大地は地球全体の大地を指しているのであろうか。またボリビアの法律に至っては、パチャママの語は出てきおらず、「母なる大地」が「生命に対して／生命の多様性に対して／水に対して／清浄な空気に対して／調和に対して／回復に対して／汚染にさらされずに生きることに対して」有する権利(Derechos de la Madre Tierra)が宣言されている(Estado Plurinacional de Bolivia. Asamblea Legislativa 2010: 3)。ボリビアの法律であるためボリビアの土地を指しているのは当然であるが、世界の大地すべてについても言及しているようにもとれる。

このような自然と同一視されたパチャママの普遍性は、上述の法律における様に国家によって、また観光業者がミステリー観光を行う上で、そして教育現場において、祖先の知識、そして伝統文化の尊重と共に自然保護を子供に教える際に言及されており、パチャママのひとつの側面となっている(Cf. 岡本2025a)。ここに見られるパチャママの

peruana Mari Luz Canaquiri gana el premio ambiental más importante del mundo. <https://rpp.pe/campanas/valor-compartido/la-peruana-mari-luz-canaquiri-gana-el-premio-ambiental-mas-importante-del-mundo-noticia-1635144?ref=rpp> (2025年8月30日最終閲覧)。

普遍性は、パチャママがよりグローバルで現代的な文脈と結びついた際に明確にされている。つまり、パチャママを本来信仰しているアンデスの人々の手から離れた際に起きていることとも言える。

現代においてパチャママがどのように捉えられているかについては、誰がどのような状況で捉えているのかということで異なっている。大地全体、それ以上に自然環境全体として普遍的にみなされるところから、アンデスの個別的な神としてみなされるところまで、パチャママは普遍的な存在から個別／地域的な存在としての柔軟な側面を持つ、むしろ持たされている³⁾。ここで考えなくてはならないのは、パチャママは当初よりそのような普遍性と個性という性質を有していたのか、そして普遍性というとき、どのような意味での普遍性なのかということである。

前者については、パチャママの広がり、ローカルな存在としてはインカ帝国の広がり、と重なっており、このことから、インカ帝国内の大地信仰におけるパチャママの存在が一般化した可能性を考えることができる。インカ帝国以前のアンデス世界における大地信仰の状況は明確にはわからないが、各地に個性豊かな文化が存在していたことはわかっており、それぞれの文化がそれぞれの大地信仰をもち、そしてその神格の呼び名を持っていた可能性は否定できない⁴⁾。例えば、インカ帝国は公用語としてケチュア語が用いられていたが、他にもモチック語（ペルー北海岸）、クリエ語（ペルー北高地ワマチュコ地方）、プキナ語（ペルー南部・ボリビア）などが存在していた（渡部2024：278-279）。それぞれの言語において、信仰対象の大地に対する呼び方が存在しても不思議ではない。

後者については、アンデスの人々がパチャママを普遍的な存在として言及するとき、それはアンデスの外の世界の人々が自然環境全体を含めた普遍性と同じ意味で言及しているのか、今一度考え直さなければならない。ここには、世界の広がり、世界の見方の

3) 拙稿（岡本2025a）において、パチャママの性質を歴史的、民族学的、社会・政治的な点から分析し、現代世界におけるパチャママの扱われ方全体を考察している。

4) それぞれの文化が隔絶していたということを意味しない。アンデス文明においてその始まり頃からインカ帝国の時代に至るまで、各地で文化が興り、それらを統一するような大きな文化が興り、それがまた崩壊して地方文化が興り、という繰り返しが3度あったと考えられている。この文化的統一を前期・中期・後期ホライズンと呼んでいる。もちろん、より緻密な編年についても発表されている（Cf. 加藤・関編1998、関2021）。ところで、この統一する文化の広がり、はアンデス世界を徐々に広げていくような形であり、そのことによって、各文化がある種の共通性を持つことになった。スペイン人の侵略前の後期ホライズンがインカ帝国にあたり、その意味でも、インカ帝国において各地の大地信仰がインカの宗教に組み込まれて統合され、インカの宗教として再び各地に流布していったことは想像に難くない。アンデス世界の文明の発展は、（緩やかな変化のある）集約と拡散の繰り返りで発展していったと言える。

違いを（認識論ではなく存在論的に）考慮していく必要がある。その際に、アンデスの人々とアンデスの外の世界の人々といった二項対立で考えるのではなく、内から外（その逆も）への連続としてとらえなくてはならない。

その中で本稿では、隣国とは異なり、パチャママもしくは大地に法人格を認めていないペルーのクスコにおいて、アンデスの人々がどのようにパチャママを捉えて信奉しているのか、また、パチャママがどのように普遍性を内包しているのかを検討していき、パチャママもしくは大地に法人格を認めても理念的になってしまう、あまりに普遍／抽象的すぎる状況になってしまうことについて考察する。これらを通じ、大地、そして自然に法人格を与えることが意味を成す状況のひとつの可能性を示す。

2. 歴史の中のパチャママ：クロニカにみる大地信仰

パチャママの存在（パチャママという語）が歴史において確認できるのは、スペイン人が侵略者としてアンデス世界に入り、文字による記録を付けたときからである。スペイン人の侵入以降に残されたクロニカ（スペイン人征服者だけでなく、カトリックの聖職者やスペイン人と先住民の混血、先住民自身が残した記録）から、大地信仰の神格がどのように記述され、パチャママがどのように現れてくるのかを、Daniela di Salvia (2013) が詳細に検討し論じている。

クロニカにおいて、大地を母（madre）と関連付けた「最初」の記述は、Agustín de Zárateが1555年に著した『ペルー地方の発見と征服の歴史』（*Historia del descubrimiento y conquista de la provincia de Perú*）においてである（di Salvia 2013：93）。また偶像として、金で作られた太陽と月の偶像と共に土で作られた大地の偶像があったことがGutiérrez de Santa Clara（1590）によって、そしてCieza de León（1553）により太陽と月と共に大地は守護者であるという記述が残されている（di Salvia 2013：94-95）。そしてPolo de Ondegardo（1571）は、人々が太陽、星、雷やそのほか様々なものと同様に、パチャママと呼ばれる大地を崇拝していたこと、そしてそのパチャママは、カマク・パチャ（*Camac pacha*）⁵⁾とも呼ばれていることを記した（di Salvia 2013：

5) カマックとは、生命のエネルギーである。大平は山の神に言及する中で次のように記している。「活力・エネルギー・生気に相当する『カマック』という観念がある。カマックを保持しているが故に、人間も含め、動植物はみな生命を維持している。山の神々は超大なるカマックを持ち、それにより生きとし生けるものを生み出し、また世界に力を及ぼす」(大平2023: 228)。このカマックの考え方も含め、di Salvia が、パチャママは自然全体を表象しており、またその生み出す力として女性／母性性を帯びた存在であると捉えていることにつながるだろう。

97-98)。また di Salvia は、パチャママが関わる儀礼やそこでの祈りについても、クロニカの記述から分析していった (di Salvia 2013 : 105-106)。

このような記述を通し、di Salvia は、パチャママは耕作地だけでなく、未開拓地を含めた自然環境全体ともみなされていることを一つの結論としている (di Salvia 2013 : 107)。これはインカを国家とする場合、国家宗教としてのパチャママの姿と言える。このことは、現代のアンデスの人々のパチャママの捉え方に大いに影響を与えつつも、現代の民間信仰としての在り方とは異なっているように考えられる。むしろ、パチャママの普遍性、つまりよりグローバルな文脈におけるパチャママの捉えられ方と同様と言える。「大きな世界の文脈とパチャママ」という構図が、インカ時代であれば国家宗教という意味で、現代であれば環境保全というグローバルな文脈で、パチャママが大地全体、もしくはそれを超えた自然全体として捉えられていると言える。いずれも、個人や家族単位ではなく、国家宗教を、もしくは憲法や法律を制定する国家という全体が、パチャママを捉える主体として表れている。di Salvia 自身、現代につながる大地信仰は、様々な文化の影響を受けつつアンデスの人々によって行われてきたものであり、地域性や家庭内における性質を忘れてはいけなと留保をつけている (di Salvia 2013 : 107)。つまり彼女自身も、クロニカの記述からだけでは、アンデスの人々の個人そして生活レベルにおいて、実際にパチャママがどのように捉えられているかは明確ではないということを暗に示している。

また、クロニカを記述したクロニスタの背景に、カトリックの影響を見ないわけにはいかない。カトリック教徒のクロニスタにとって、神は唯一の、そして一にして全でもある存在である。そのためアンデスの複数の神々について記述することにおいて、どうしても普遍的な神の要素が入ってきてしまうことが考えられる。当時のアンデス世界において (も)、世界の在り方が異なっており、記述した内容に影響を与えていたことは見逃せない。

3. アンデスの人々にとっての実質的なパチャママ

3.1 ケチュア語の辞書に見るパチャママ

ところで、パチャママの語をケチュア語の辞書に見てみると、大変興味深い内容が書かれている。Jorge A. Lira が1944年に著したケチュア語とスペイン語の辞書のパチャママの項目には、次のような記述がある。

(パチャママ) 大地の女性神。母なる大地。ギリシア人にとってのガイアにあたる。

神聖で、ただ耕作された大地という存在でなくてはならない。人間の活動、仕事によって耕作された大地である。人間の活動によって変更を加えられていない大地は、アリユパ (*állpa*) の名が与えられており、悪影響を及ぼす精霊の性質を持つ。(Lira & Mejía Huamán 2008 [1944] : 311) (強調は筆者による)

ここには、パチャママは大地全体を表しているわけではなく、もちろん自然そのものでもなく、人間が耕した大地＝土地であると述べられている。これは国家宗教としてのパチャママではなく、よりローカルな人々、そして生活世界におけるパチャママの存在が表現されていると考えられる。そして、人間の手が加えられていない大地は、悪い精霊が宿っている「アリユパ」としている。手が加えられていないということは、生産活動が行われていない土地ということ、そして生産活動に向いていない土地ととれる。

一方で、アリユパの項目には「脆い土地、埃」といった記述があり、生産に向かない土地であることがうかがえ、そのことを「悪い精霊が宿っている」と考えていることがわかる。そしてそれに加えて「パチャママは豊穡の女性神であり、人間の活動によって手を加えられた大地だけが信仰の対象であった」と大地信仰の説明がある (Lira & Mejía Huamán 2008 [1944] : 35)。大地と共に生きる人々にとって、自らが耕す大地＝土地、そこから収穫を得ることができることが、彼らにとってのパチャママであるということが読み取れる。そこには常に生産されるものがあり、その恵みを受け取ることができる場合にパチャママの存在を見ていると言える。

3.2 儀礼活動の中に見るパチャママ

この「人間の手が加えられた大地」がパチャママであることは、アンデスの人々が行う大地に対する儀礼からも垣間見られる。8月に行われる、大地への返礼とも言えるパゴ儀礼 (Pago a la tierra) (直訳は「大地への支払い」) は、大地から直接恵みを受けている人々にとっては、自ら生産を行っている土地におけるパチャママに対する儀礼と言える⁶⁾。大地から直接の恵みを受ける人々は、当然と言えば当然であるが、恵みを得られる土地に関心があるのであり、それ以外の大地は彼らにとって特に関心は無い。パチャママを普遍的な大地、そして自然全体としてみる必要はない。かといって、彼らがパチャママを自らの土地だけの存在と明確に言うことは無く、儀礼中や普段の会話の中でも、むしろ大地全体を表すような呼びかけを行っている。つまり大地から恵みを受け取る

6) 儀礼中に唱える祈りの中で、自らの土地の名前を呼ぶことから良くわかる。これをパチャママの個性として論じた (岡本2025a: 217)。

人々にとって、パチャママは既に両義的な存在であると言える。

一方で、大地から直接的な恵みを受け取っていないアンデスの人々はどうであろうか。ここではまず、日本で言ういわゆる地鎮祭のような儀礼としてのパゴ儀礼を取り上げた。

2010年8月28日、クスコ郡（Provincia Cusco）内のサン・ヘロニモ行政区（Distrito San Jerónimo）における未利用の土地に、2階建ての大きな市場を建設する計画が実行に移される際に、パゴ儀礼が行われた。当時のサン・ヘロニモ行政区では、クスコ郡の中心部から南へ延びる幹線道路であるクルトゥラ大通り（Avenida Cultura）の延長沿いに建物がまばらに建ち始めていたところであり、現在のような大型スーパーや中流家庭の住宅街はあまり見られなかった。しかし、当時から市街地は徐々に広がっていく様相をみせており、幹線道路沿いは発展していく可能性が明らかな状況であった。その一環としての市場建設であり、市場が建設される土地も、クルトゥラ大通り沿いに位置していた⁷⁾。

このパゴ儀礼は、市場建設を主導しているサン・ヘロニモ行政区の自治体（資金はクスコ都市貯蓄信用金庫⁸⁾）が中心となっており、一般にも公開されたセレモニーとして行われた（招待状がなくてもセレモニーの様子は容易に伺うことができ、最終的には観覧者も儀礼の一部に参加した⁹⁾）。大地に備える供物は、個人でパゴ儀礼を行う場合の何倍も大きいものであった¹⁰⁾。主催者の一人（女性）にこのパゴ儀礼を行う意義を伺ったところ、「私たちは（大地／パチャママに対して）かなりの信仰を持っている。」（Nosotros tenemos bastante fe [en la tierra/Pachamama].）「私はクスコの人間だから、（大地／パチャママに対して）大きな信仰を持っている」（Como soy cusqueña, tengo

7) 現在のサン・ヘロニモ行政区のクルトゥラ大通り沿いは開発が進み、大型ショッピングセンター（Centro Comercial）や、大型のホームセンターが立ち並んでいる。またその周辺に、多くの住宅街が出来上がっている。しかしながらどういった経緯かわからないが、市場の建設は行われておらず、現在は行政が管理する公園となっている。計画が変更となった際に、改めてパゴ儀礼が行われたかどうか不明である。しかしこのようなことは、私の知る限りよくあることであり、地元の人々も、またか、よくあるな、という反応を示すだけで、事態を問わないことがほとんどである。

8) 正式名称（Caja Municipal de Ahorro y Crédito Cusco S. A.）よりも、クスコ都市金庫（Caja Municipal Cusco）として認知されている。

9) 私自身はその当時、パゴ儀礼を頼まれたクランデーロ（伝統的呪術師）を調査しており、その関係上、一緒に儀礼に参加することができ、招待客の一人という位置づけであった。

10) 個人や家族単位で行うよりも、グループや企業、このような政府関係者によって行われるパゴ儀礼の方が、請願する内容が大きくなるために供物が大きくなっていく。そこには市場原理の資本主義的な精神が表れている。拙稿参照（岡本2013）。

mucha fe [en la tierra/Pachamama].)と答えた。この女性の発言において、大地／パチャママに理念的な意味を見ることができる一方で、実質的な意味は言明されていない。理念的な意味としては、大地＝パチャママとして、大地全体として表現しているということ。実質的な意味とは、パチャママは市場を建設する土地でしかないということ。ここでは、市場建設がうまくいくように願って儀礼を行っているのであり、その土地以上の大地には関心がない。しかしこのような実利的な見方が表明されることは、彼女の立場上からもなかった。彼女は政府の人間として発言しており、個人的なパチャママや大地信仰の認識を述べたわけではないのは重要な点である。

ついでクスコ都市部での、大地から直接恵みを得ていない人々の場合の一般的なパゴ儀礼について、簡潔に述べておく。アンデス世界においては、多くの人が8月になるとパゴ儀礼を行う。8月は乾期であり、パチャママが空腹になっている（と考えられる）ためである。空腹のパチャママに儀礼を行うことで食事を与え、恵みを得るという形になる。クスコ都市部でも同様である。しかし大地から直接恵みを受けていない人々にとって、パチャママは大地ではなく、請願する神となっている。パチャママにお供え物をして、願いを叶えてもらう、というだけである。ここでは、パチャママは比喩として恵みを生み出す大地となり、実質的には大地とは関係のない、ただ願いをかなえてもらうための神となっている¹¹⁾。

先の地鎮祭としてのパゴ儀礼においても、建物の性質上、大地と関わりを持っており、儀礼における実質的なパチャママは、市場建設予定の個別的な大地とすることができる。しかしより実質的な意味であれば、一般的なパゴ儀礼と同様となる。市場の建設のためにパチャママへ伺いをたてているだけでなく、建設後の市場の成功も同時に願っているためである。つまり大地からは直接の恵みを得るわけではないが、市場の成功という恵みをパチャママから得たいという状況になる。そこには、パチャママや大地の普遍的な性質は必要がない。あくまで、市場を建設する個別の土地のパチャママで良い。一方で、市場の成功を約束する神としての、大地からは切り離された普遍性は残っている。

11) 人々がパチャママに儀礼を行い供物を捧げることは、パチャママから（直接／間接を問わず）恵みを受けるためであり、このことはアンデスの互酬制であるアイニ（*ayni*）として分析されてきている。（Cf. Allen 2002 Isbell 2005 (1978), Leinaweaver 2019, 岡本2013 etc.）。この互酬制は、アンデス社会における社会関係を成り立たせているのであるが、神格との関係においても同様に互酬と呼んでよいかは留保が必要だろう。儀礼という形での慣習は、ある種の「期待しない互酬」と呼べるものではないだろうか。大地／パチャママとアンデスの人々の互酬制に関しては、別稿で論じたい。

3.3 大地／パチャママ信仰の複層性

このようにみえてくると、パチャママ自体が普遍的であり個別的であるということは、パチャママを信仰する人々がどのような人なのか、またどういった立場なのか、そしてどのような文脈にあるのかということによって変わってくることがわかる。またある人にとってのパチャママ像は一つではなく、その一人の人物においても状況によっても、パチャママは普遍的であったり個別的であったりするような性質を帯びることとなる。それが現代的な意味だけでなく、di Salvia がクロニカから論じている通り、インカ時代においても同様であっただろう。

インカ時代、インカ帝国を統べるインカ王をはじめとする貴族層にとっては、大地はインカ帝国の領土そのものであっただろう。その意味で、大地＝世界の広がりだとすれば、世界そのものがパチャママとなる。その国家宗教としてのパチャママを受け入れつつ、インカ帝国内で生きていた一般の人々にとっては、生活世界におけるパチャママは、自らが耕す大地そのものであっただろう。後者の点は、現代でも変わらない。とはいえ前者の意味合いは強力であり、国家レベルでの儀礼を通して、人々の間で普遍的なパチャママは内面化されていったであろう。インカ時代の人々と現代のアンデスの人々を簡単に比較することはできないが、その伝統を引き継いでいるので、変化がありつつも同様な形で、複層的に、しかしながら一つの総体としてパチャママを捉えていただろう。

一方で、アンデスの人々とアンデス世界の外側の人々がパチャママを大地全体、そして自然全体とみなすことは同じと言えるだろうか。ヒントになるのは、インカ時代の人々のパチャママの普遍的な捉え方である。インカ時代の世界の広さがパチャママの普遍性だとすれば、パチャママそのものの在り方が異なる。現代においてアンデス世界の人々とアンデス世界の外側の人々の世界に対する考え方が異なっていれば、パチャママの普遍的広がりというものは世界を表しているもので、異なった見方をしていることになる。これは現代のアンデス世界の内側と外側という対立ではなく、アンデス世界に住む人々それぞれによっても世界の在り方は少しずつ異なっており、それゆえパチャママの在り方は異なると言える。誰であろうとも、大地＝地球そのものという考えを持っていれば、パチャママは世界全てを含みこむことができる。このことから、世界全体における環境問題を、全世界の人々で取り組まなければならない課題としてみなすことが可能であり、パチャママは自然環境全体として守らなければならない存在とみなすことになる。

4. おわりに

大地／パチャママに対する見方は、人々によって、そして人々自身の状況によって異なることが明らかになってきた。これはそれぞれの人の認識レベルということではなく、生きる世界という存在論的なレベルにおける違いであり、アンデスの世界の内側と外側といった単純な二項対立のような違いではない。また、いち個人のなかに個別的かつ普遍的なパチャママもしくは大地があり、そもそもそれらが混然一体としたものがパチャママであるということが明確になってきた。

ところで、アンデスにおいて大地／パチャママ信仰を行う者は、カトリック教徒であることも、パチャママを個別的かつ普遍的に捉えていることに影響を与えている。先述のクロニスタの記述に表れる普遍性と同様のことが、現代の人々にも起きている。このカトリックの内面化は、言語においても影響を与えている。ボリビアで調査を行った Howard-Malverde がケチュア語、アイマラ語、スペイン語の3言語を話す Doña Segunda にパチャママの語について話を聞いていた際に、彼女は、「パチャママはスペイン語であり、ケチュア語では『ビルヒナ』だ」と述べている¹²⁾。ここで言う「ビルヒナ」とはスペイン語で *virgen*、つまり *Virgen María*（聖母マリア）を指す語から来ている (Howard-Malverde 1995: 143)。しかし Doña Segunda は、「ビルヒナ」がケチュア語であると認識しており、カトリックと共に神格の表現についてのスペイン語も内面化している¹³⁾。

この矛盾するような状況が、大地信仰そしてパチャママ信仰の複層的状況である。そのため、アンデス世界の外側の論理で大地やパチャママを具体的なようで抽象的に認識する限り、法的に人格を認めてその権利を主張したとしても、理念的になってしまう。つまり、パチャママであれば大地や自然全体の単なる比喩であり、大地であれば全ての大地を普遍的に意味してしまう。そのために、アンデス的な大地信仰やパチャママ信仰は、認識の仕方や方便ということに矮小化され、これまでと同様に対象としての自然という扱いの域を超えることができなくなる¹⁴⁾。一方で、アンデス世界の人々が、アンデ

12) Doña Segunda はケチュア語で答えている。原文は次のようである。「“Pachamama” ninku castellanomanta, “Pachamama” nincik. Kay qhichwamantari, “wirhina”. “Wirhina” a “wirhina”.」 [Howard-Malverde 1995: 143].

13) 大地母神信仰と聖母信仰の関係、特にその女性性（生み出す力を含む）に関する点は忘れてはならない。

14) 本稿の冒頭で触れたように、近年、具体的な自然に法的人格が与えられる中、隣国とは異な

ス世界そのものをパチャママや大地というのであれば、彼らもその世界の認識を広げ、アンデスの世界の外側の人々の認識を共有することが必要であろう。

このようにみえてくると、どちらかいずれかが一方の世界を受け入れる、もしくは包摂するのではなく、互いに連続した世界として、各々が複数の世界を持ち複数の世界の連続性のなかに共に生きることが、今後の世界に必要なことだろう¹⁵⁾。そのような中で、具体的な名のついた自然だけでなく、一般的な意味での自然に対して法的人格を認めることにより、法的人格を自然に認めることの一層の意味とその実効性が出てくるだろう。

参考文献

- Allen, Catherine J. (2002). *The Hold Life Has: Coca and Cultural Identity in an Andean Community* (2nd edition). Smithsonian Books.
- 加藤泰建・関雄二編 (1998). 『文明の創造力——古代アンデスの神殿と社会』角川書店.
- 大平秀一 (2024). 「インカと山の神々」青山和夫編『古代アメリカ文明——マヤ・アステカ・ナスカ・インカの実像』pp.201-268、講談社.
- 岡本年正 (2013). 「資本主義経済におけるアンデス高地の民間信仰——供物としてのデスパチヨの事例」『超域文化科学紀要』18: 207-235.
- 岡本年正 (2025a). 「現代世界におけるパチャママの二面性」『Aoyama Journal of International Studies』12: 211-223.
- 岡本年正 (2025b). 「ママ・イレネが体現するアンデス的多様性」『ペルー映画祭 Vol.3公式パンフレット』pp.36-37、プエナワイカ.
- 奥野克己 (2024). 『ひっくり返す人類学——生きづらさの「そもそも」を問う』筑摩書房.
- デ・ラ・カデナ、マリソル (2017). 「アンデス先住民のコスモポリティクス——『政治』を超えるための概念的な省察」『現代思想』45(4): 46-80.
- di Salvia, Daniela. (2013). La Pachamama en la época incaica y post-incaica: una visión andina a partir de las crónicas peruanas coloniales (siglo XVI y XVII). *Revista Española de Antropología Americana*. 43(1): 89-110.
- Estado Plurinacional de Bolivia. Asamblea Legislativa. (2010). *Ley de Derechos de la Madre Tierra, Ley N° 71 del 21 de diciembre del 2010*. Gaceta Oficial del Estado Plurinacional de Bolivia.
- Howard-Malverde, Rosaleen. (1995). “Pachamama is a Spanish word”: Linguistic Tension between Aymara, Quechua, and Spanish in Northern Potosí (Bolivia). *Anthropological*

りペルー政府が大地やパチャママに法律上人格を認めてきていないのは、認めることによる利点が見いだせていないからかもしれない。一方で国家ではないが、同じペルーのプーノ県において、プーノ地方政府が2025年4月にチチカカ湖に法的人格を認めている。(El lago Titicaca ya tiene derechos. <https://www.servindi.org/seccion-ambiente-actualidad-opinion/28/04/2025/lago-titicaca-ya-tiene-derechos-victoria-con-rostro-0>) (2025年8月31日最終閲覧)。チチカカ湖という固有の名前に、具体的な主体を見出しやすいからと言える。

15) 実際には、これまでにアンデス世界において実践されてきた「アンデス的多様性」としてみることとも可能だろう (Cf. 岡本2025b: 37)。

- Linguistics* 37(2): 141-168.
- Isbell, Billie Jean. (2005 [1978]). *Para defendernos: ecología y ritual en un pueblo andino*. Centro Bartolomé de Las Casas.
- Leinaweaver, Jessaca. (2019). Kinship, Households, and Sociality. In Seligmann, Linda J. & Katheleen S. Fine-Dare (eds.). *The Andean World*. (pp.235-248). Routledge.
- Lira, Jorge A., & Mario Mejía Huamán. (2008[1944]). *Diccionario: quechua – castellano, castellano – quechua*. Editorial Universitaria.
- República del Ecuador. Asamblea Constituyente. (2008). *Constitución de la República del Ecuador*. Asamblea Constituyente.
- 関雄二 (2021). 『アンデスの考古学(新版)』(世界の考古学1)同成社.
- 渡部森哉 (2024). 『インカ帝国——歴史と構造』中央公論新社.